

県道三田後川上線の工事現場から

目下、兵庫中央病院の南側付近で県道三田後川上線の拡幅工事が進められています。その工事現場には写真のような見事な地層の断面が現れていました。濃い色（赤茶色）の部分は大阪層群、白っぽい部分は神戸層群とよばれ、いずれも市域の地形の原形となる地層（基盤）です。

市域の代表的な基盤には大阪層群・神戸層群のほかには有馬層群と丹波層群があり、この順に形成年代が古くなります。これらの基盤が地表面で変形をうけた結果が地形です。母子・永沢寺をはじめとする篠山市との境界付近の山々を形成する丹波層群や、有馬富士に代表される山頂がとがった山並みを形成する有馬層群



拡幅現場の地層断面

は固い岩石ですが、神戸層群とその上に堆積する大阪層群は、地質的に新しい地層でまだよく固まっていません。特に最も上層、つまり最も新しい大阪層群はまだ粘土層の状態を示しています。神戸層群と大阪層群は海や湖、あるいはそこに流れ込む川によって形成された地層で、いずれも三田市域は兵庫県内での分布の北限にあたります。したがって三田盆地は、この地が、瀬戸内海から連なる太古の海または湖の北の果てであった時期に、そのおおまかな形ができあがったと考えることができるのです（市史第10巻地理編参照）。

市域南部に位置する多くの集落やニュータウンは、これらの基盤がさらに湖や川の作用で平坦化された段丘地形の上に立地しています。これらの段丘面上は水の確保さえできれば、高燥で安定した住宅適地となります。その意味で現在の三田市の発展はこれら段丘地形の賜物ともいえるのです。段丘面上に開発された新都市と、自然地形を活かして立地した古い集落、そしてその背後に連なる「基盤」の美しい山並みは、「田園文化都市」としての市域の景観を特徴づけています。地形とその基盤をなす地質は太古の大自然が残してくれた宝物であり、人と自然がともに輝くまちの大切な資源でもあるのです。